日、15日間投与しても副作用の発現がなかったことは特筆されることである。著効率 63.3% を示したこととあいまって、安全度の高い下痢治療薬として有望な薬剤といえることができる。

要 約

1) ビフィダス菌製剤 (R-103) は犬の慢性および急性腸炎の下痢に対して、63.3% の著効率を示した。投与は経口的に行なわれ、1日体重 1kg 当たり、32~750 mg (平均 113 mg) であった。

2) 抗菌剤および抗生物質投与が無効であった慢性下痢症に著効を示した。

3) 駆虫剤との併用により、下痢回復を促進する傾向が認められた。

4) 過食、あるいは腐敗した食物や不消化物を食べたことに起因する下痢に有効であった。

5) 重篤な全身症状を伴った下痢に対しては、ほとんど効果が認められなかった。

6) 本試験を通じて、本剤投与による副作用はまったく認められなかった。

本試験において、微生物学的見地から、終始貴重など

助言を頂いた日本獣医畜産大学の寺田厚助手に深謝し、またビフィダス菌製剤を提供された日清製粉株式会社に謝意を表する。

文 献

1) TOMOTARI MITUSOKA.: *Zent. blatt fur Bakt. I. Orig.*, 209, 52~64 (1968). 2) 光岡知足: 日本医師会誌, 67, 132~148 (1972). 3) 光岡知足: 日本細菌学誌, 29, 773~788 (1974). 4) 渡辺章子, 務台方彦: 小児科臨床, 28, 19~28 (1975). 5) 内田和夫, 尾上栄一: 日獣畜大紀要, 13, 57~62 (1964). 6) 内田和夫, 尾上栄一: 日獣畜大紀要, 14, 55~59 (1965). 7) 内田和夫, 尾上栄一: 日獣畜大紀要, 15, 83~85 (1966). 8) 内田和夫, 尾上栄一, 寺田 厚: 日獣畜大紀要, 17, 42~46 (1968). 9) 松本治康, 馬場栄一郎, 石川尚明: 日獣学誌, 34, 255~261 (1972). 10) 光岡知足, 木村修武, 小林昭男, 山本脩太郎: 日獣学誌, 32 (学会号), 35~36 (1970).

11) 鷹取正良, 相見和宏, 三田村徹雄: 獣畜新報, 643, 739~742 (1975). 12) 松本治康, 石川尚明, 馬場栄一郎: 日獣学誌, 30 (学会号) 97~98 (1968). 13) 馬場栄一郎, 松本治康, 石川尚明: 日獣学誌, 31 (学会号) 31~32 (1969). 14) OLAF BERGEIM: *J. Infect. Dis.*, 66, 222~234 (1940).

イヌに感染したイエダニ *Ornithonyssus bacoti* (HIRST, 1913) の一例

小方宗次* 板垣 博* 石田文雄** 中井隆夫**

(昭和 50 年 12 月 10 日受付)

A Canine Case of Infection with the Tropical Rat Mite, *Ornithonyssus bacoti*

MUNETSUGU OGATA, H. ITAGAKI, *F. ISHIDA and **T. NAKAI

(Azabu Veterinary College, Sagamihara, Kanagawa; *Japan Animal Medical Center, Shibuya, Tokyo)

SUMMARY

In June, 1975, about fifty mites were collected from a male Maltese dog bred in Tokyo and identified morphologically as the tropical rat mite, *Ornithonyssus bacoti* (HIRST, 1913). The dog suffered from intense

itching and small eruptions were formed in bitten foci. The mites might have come from house rats. They infested the dog owner's family in addition.

緒 言

イヌにおけるイエダニの寄生に関するわが国での記載は、有吉 (1930)²⁾, YAMADA (1930)⁸⁾, 森下ら (1935)⁵⁾ にみられる。有吉は、10 数匹が寄生したイヌの例を、また、YAMADA, 森下らは、宿主としてイヌをあげている。このほかにも臨床的な寄生が予想されるが、実際の報告例は少ない。著者らは、1975 年 6 月に都内で飼われていたイヌ (マルチス種) より、イエダニを検出した

* 麻布獣医科大学 (神奈川県相模原市淵野辺 1-17-71)

** 日本動物医療センター (東京都渋谷区本町 6-22-3)

ので、その概要を報告する。

臨床所見ならびに経過

症例: マルチス種, 雄, 5 才齢

初診: 1975 年 6 月 14 日

既往歴: 特記すべきものはない。

飼育環境: 都内であるが、周囲は湿地帯で、ネズミが多く棲息している。

稟告: 1975 年 6 月上旬より、患犬の痒痒が著明となる。そのうち家人にも痒覚を訴える者がでたため、患犬を詳しく調べたところ、全身に多数のダニと、赤色の小

丘疹を認めた。元気、食欲などには、異常は認めなかった。

初診時所見：ほぼ全身に約 50 匹の運動の活発な、褐色のダニが寄生。頸部や腰部には、直径 1~3 mm 大の赤疹がみられ痒痒が著明であった。その他一般所見には、異常を認めなかった。

治療：全身を剪毛し、動物用薬用シャンプー（成分—二硫化セレン、ほか）や殺虫消毒薬（成分—オルソジクロロベンゼン、塩化クレゾール）にて薬浴した。皮膚炎部には、ウンデシレン酸、プレドニゾロン、抗ヒスタミン剤などを使用した。また、屋内のダニとネズミの完全駆除をおこなうよう指示した。このほか、ダニの再感染防止のためイヌ用ノミとり首輪（成分—ジクロルビニルリン酸、ジメチル）を装着した。

経過：4日後の来院時には、ダニは認められず、皮膚の変状も治癒していた。また同時に、家人の痒覚も消退したとのことである。その後、ヒト、イヌとも再感染をみていない。

同 定

本例では、ダニ採集前に、患犬を洗ったため、大多数のダニが駆除されており、最終的に採取できたのは、計 12 匹であった。その内訳は、雌ダニ 8 匹、雄ダニ 2 匹および若ダニと思われるもの 2 匹であった。これらを 70% エタノールで固定後、ガムクロラル液で透化、封入し、形態的観察をおこなった。

雌：体長（頸体部+胴体部）—平均 1,083 μ （最大 1,540 μ ，最小 868 μ ）。色は赤褐色を呈す。（頸体部）鉗角の先端は鉗状をなす。（胴体部）長円形をなし、4 対の歩脚がある。体全体に多数の剛毛をみる。なかには、

写真 1 雌成ダニ（腹面）；胴体後部に卵を保有する

胴体後部に卵を保有する個体もある（写真 1）。背面には、細長い背板をみる。前体前部の腹面には、胸板がある。胸板は、横に長く、長方形をなし、3 対の剛毛をみる。胴体部のほぼ中央には、生殖腹板があり、その中央部側縁には、1 対の剛毛をみる。胴体後部には、卵円形の肛板がある。それには、中央に 1 対、後縁近くに 1 本、合計 3 本の剛毛がみられる（写真 2, 3）。

雄：体長 518 μ ，560 μ ，体幅 252 μ ，266 μ 。雌よりも小型である。（胴体部）背面には、胴体部とほぼ同長で、幅の広い、背板をみる。腹面には、胸板、生殖腹板および肛板の合した融合腹面板がある。

写真 2 雌成ダニの頸体部ならびに胴体前部（腹面）；胸板上に 3 対の剛毛がみられる

写真 3 雌成ダニの胴体部（腹面）；生殖腹板，肛板ならびに卵の一部が観察される

以上の諸点、とくに、雌の背板が狭卵形で細長く、生殖腹板が倒三角形で、後方に向かって細くなり、後端がとがる点から *Ornithonyssus* 属のものと判断した。さらに、雌の胸板が横に幅広い四角形で、3対の毛を有する点で、本種をイエダニと同定した。なお同定の完全を期すために、国立科学博物館動物研究部の浅沼 靖博士に鑑定を依頼し、本ダニがイエダニ *Ornithonyssus bacoti* であることが確定した。

考 察

イエダニのわが国への移入は、大正の末期といわれ、有吉 (1929, 1930) が、初めて報告している。その後、本ダニには2種類あると考えられ、学名についても、山田 (1930) の命名した *Liponyssus nagayoi* と、有吉 (1929)、岸田 (1936) が採用した *L. bacoti* との2説があった^{1,6)}。のちに *L. nagayoi* について、浅沼 (1948)¹⁾ が詳しく検討し、これを *L. bacoti* のシノニム (同種異名) であると判定した。現在では、イエダニの学名として、*Ornithonyssus bacoti* が採用されているが、属名に *Macronyssus* を用いている学者もある⁶⁾。

イエダニの宿主については、過去に多くの報告がある。しかしながら、文頭に述べたごとく、イヌについての報告は少ないようである。STAUDTMAN, R.W. ら (1958)⁷⁾ は、このダニの宿主について、過去の報告をまとめているが、その中に「家畜」という記載はあるが、とくにイヌと指定していない。この文献に引用されている宿主は次の通りである。

哺乳類—有袋類 (オポッサム科) オポッサム; 食虫類 (トガリネズミ科) トガリネズミ *shrew*; 霊長類 (ヒト科) ヒト; 齧歯類 (リス科) ジリス *Citellus* sp., ハイイロリス *gray squirrel*, (ボケツネズミ科) *Perognathus hispidus*, (キヌゲネズミ科) コメネズミ *Oryzomys* sp., バッタネズミ *Onychomys leucogastus*, コトンラット *Sigmodon* sp., モリネズミ *Neotoma* sp., ハムスター *Cricetus*, アレチネズミ *Gerbillus* sp., (ネズミ科) モリネズミ *Apodemus sylvaticus*, シマネズミ *Arvicanthis* sp., クマネズミ, エジプトクマネズミ, アカクマネズミ, ドブネズミ, ヨーロッパハツカネズミ, アフリカトゲネズミ *Acomys* sp., (テンジクネズミ科) *Caviaaperea*; 食肉類 (アライグマ科) アライグマ

Procyon sp., (イタチ科) スカンク *Myphitis* sp., マダラスカンク *Spilogale* sp., (ネコ科) ネコ, 鳥類—家禽, シルスイキツキ

(分類は谷津, 内田動物分類名辞典による)

このように、本ダニは多くの宿主をもつが、とくにネズミ類に多く寄生し、犬は必ずしも好宿主ではない。本症例においても、本ダニの犬への感染源は、飼育環境や季節などを併せ考えると、同家もしくは、その周辺に棲息するネズミに由来するものと推察される。

本ダニは、ヒトにおいて、実験的に発疹熱病原体 *Rickettsia typhi*, リケッチア痘瘡病原体 *Rickettsia akari*, ベスト菌, 再帰熱病原体などを保有、伝播することが認められている⁸⁾。このように、ヒトの病原に関与するといわれている本ダニが、イヌ, ネコなどの小動物に対しても、何らかの病的因子をもつことは、十分考えられる。愛玩動物の増えている今日、獣医学の分野からも、さらに詳しく検討する必要があるように思われる。

要 約

都内のイヌ (マルチス種) 一例から検出されたダニについて、形態的検討をおこなった結果、イエダニ *Ornithonyssus bacoti* であることが判明した。臨床的には、患犬に全身性の瘙痒と赤疹を認めた。

稿を終るにあたり、本ダニの同定ならびに、貴重な文献提供をいただいた、国立科学博物館動物研究部浅沼靖博士ならびに有意義なるご助言をいただいた東京女子医大寄生虫学教室松本克彦博士に深謝いたします。

文 献

- 1) 浅沼: 資源研彙報, 11, 14 pp. および 35~26 pp. (1948).
- 2) 有吉: 病理学紀要, 6, 371~393 pp. (1929).
- 3) BAKER, E.W. and WHARTON, G.W.: *An Introduction to Acarology*, 465 pp., New York, MacMillan (1952).
- 4) GEORGI, J.R.: *Parasitology for Veterinarians*, 2nd Ed., 252 pp., Philadelphia, W.B. Saunders (1974).
- 5) 森下, 大森: 台湾医学会雑誌, 32, 2, 154~161 pp. (1935).
- 6) 佐佐学: ダニ類, 第1版, 79~81 pp., 東京, 東大出版 (1965).
- 7) STRAUDTMANN, R.W. and WHARTON, G.W.: *A Manual of Mesostigmatid Mites Parasitic on Vertebrates*, *Inst. Acarol. Contr.* 4, 399 pp. (1958).
- 8) YAMADA: 動物学誌, 43, 237~249 (1930).
- 9) 内田 享 (監修) 谷津, 内田: 動物分類名辞典, 1411 pp., 東京, 中山書店.

日獣製作カラスライド

企 画 日本獣医師会 指導・著者 農林省家畜衛生試験場 飯塚三喜 農林省畜産試験場 野附 敏
千葉県農業共済組合連合会臨床研修所 原 茂

35枚1組 解説書付 頒 価 3,500円 (送料 120円)

内容概要: 序論 経済損失 急・慢性乳房炎の症状 未経産牛乳房炎 乳腺の組織像 乳房炎の組織像 原因菌の分類 病原菌の検査法 起炎菌 誘因と予防対策 (牛舎衛生 牛体の手入れ ブドウ球菌の体表分布状態 蹄の手入れ 搾乳衛生 デッピング 搾乳と乳房炎 飼養と環境 飼料と乳房炎との関係 搾乳管理 ミルカー消毒) 臨床検査 乳質検査 治療法 (薬物による治療 乾乳治療)

(申込) 社団法人 日本獣医師会 東京都港区南青山 7-2-10 (〒107)
電話 東京 (03) 406-5271 郵便振替口座 東京 6-68304